

維新史回廊だより

第9号
平成20年
(2008年)
9月発行

編集 総務課
発行 山口県環境生活部文化振興課(山口市滝町一一〇八三一九三三一六二七)

◇はじめに◇

「維新史回廊だより」を「愛読いただきありがとうございます。」

今回は、これまでの回廊だよりとは少し趣を変えて、「幕末期萩藩の政治機構」と題し、幕末期の萩藩で中級武士たちが重要な役割を果たすことができた理由を、その政治のしくみから読み解いていきます。

解説は、山口県史編さん委員会明治維新部会の上田専門委員です。

◇幕末期萩藩の政治機構◇

○幕末の萩藩では、どのような人物が藩政の実権を握っていたのでしょうか。

幕末の萩藩では、藩政上、重きをなした人物として、村田清風や坪井九右衛門、周布政之助、椋梨藤太、木戸孝允、広沢真臣などが有名です。これらの人々は皆、禄高が一五〇石前後以下の大組（八組とも）と呼ばれる「階級」を出自とする、いわゆる中級武士たちでした。

しかし、藩主を頂点に、家格・禄高によって厳格に序列化された萩毛利家臣団のなかで、中級武士たる彼らが何故、重要な役割を果たすことが出来たのでしょうか。この問題を解く鍵は、実は近世期を通じて徐々に整備・拡充されてきた萩藩の政治機構、近世の武士たちが身を置いた近世的な官僚機構のなかにあります。

○萩毛利家家臣団の「格付け」と「役職」の関係はどのようなものでしたか。

近世初頭、大家家の家臣団はまさに軍事組織として編成されていました。そこでは武士たちが、軍事組織内の地位に相応しい家格・禄高を与えられ、序列化されていました。

しかし、徳川幕府の下で国内の平和が実現し、武力の行使が停止されると、武士の果たすべき職分は、戦闘者としてのそれよりも、治者とりわけ行政官

としてのそれが重きをなすようになります。藩領統治・藩政運営のための機構がしだいに整備されていくと、それに対応する家臣団が形成されていきました。

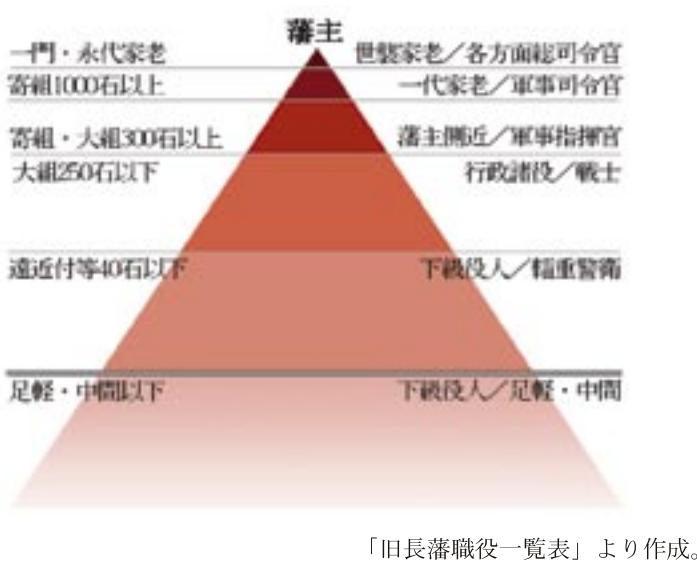
毛利家編 輯所に勤務していた時山弥八が大正五年（一九一六）に上梓した『稿本もりのしげり』には、萩毛利家家臣団内の「階級」やその由来をまとめた「旧長藩士卒階級一覧表」と、藩主側近の諸役から始まって、軍事・行政組織上の諸役、奥向や江戸・京・大阪の各藩邸に関わる諸役、明倫館をはじめとする学校関係の諸役等々、大小併せて六一〇の役職を一覧にまとめた。

「旧長藩職役一覧表」

が収載されており、家臣団と職制の概要を知ることができます。

萩毛利家の家臣たちは、一門を筆頭に永代家老・寄組・手廻組・物頭組・大組・船手組・遠近付・無給通等々、全部で七〇の「階級」に編成され、この「階級」と禄高・俸給によって格付けされ、序列化されました。そして、その格付けに応じた役務を果たす義務を負います。その対応関係は「旧長藩職役一覧表」のなかに「就

图表1 萩毛利家家臣団の格付けと役務の対応関係



職階級」という項目で記載されています。

図表1は、その両者の対応関係の概要をまとめたものです。ここには比較的上級の武士が軍事司令官・指揮官に就任し、中・下級武士が行政上の諸役に携わるという傾向がはつきりと現れています。「就職階級」は、役職上の上下関係と、家臣団内部の格付け・軍事組織としての指揮命令系統との間に矛盾をきたすことがないよう設定されていたのです。

○萩藩では、なぜ中級武士たちが活躍できたのでしょうか。

このような、萩毛利家家臣団の「就職階級」の機構が運用されていく過程で、特定の役職については、その職掌・権能が、個々の武士の家臣団内部における格付けを越えて、藩政に対する影響力を強めていく、という状況が生まれてきます。それら特定の役職者群を、萩藩では「政府」と呼んでいました。

萩藩には、この「政府」と呼ばれる集団が二つあります。一つは江戸当役（行相とも呼ばれる）の配下に組織された江戸方政府（行相府）と呼ばれる

官僚集団、もう一つは当職（国相とも呼ばれる）の配下に組織された地方政府（国相府）と呼ばれる官僚集団で、**図表2**はその組織図です。



「旧長藩職役一覧表」より作成。

江戸当役は藩主の参勤交代に随行して藩地と江戸とを往復し、幕府・諸藩との応接から大組士以上の進退により、官位を上

げ下げすること)に至るまで、藩主の決裁が必要な案件を総監します。当手元役以下の諸役で、「政府」「政府員」とも呼ばれる一方、両職の「付属の面々」あるいは「被官」などとも呼ばれていました。幕末に活躍した村田清風や周布政之助といった人物がその手腕を揮ったのは、この「政府」中の用談役や手元役あるいは右筆役という役職に在職している時でした。

この両職の下で、関係事務を処理し諸政策の起案等を担つたのが用談役・手元役以下の諸役で、「政府」「政府員」とも呼ばれる一方、両職の「付属の面々」あるいは「被官」などとも呼ばれていました。幕末に活躍した村田清風や周布政之助といった人物がその手腕を揮ったのは、この「政府」中の用談役や手元役あるいは右筆役という役職に在職している時でした。

○「政府」のなかの「就職階級」はどのようになっていたのですか。

この「政府」諸役の「就職階級」を一覧にまとめる、**図表3**のようになります。

江戸当役の参謀たる用談役、両職を補佐する手元役は二五〇～二〇〇石以下の大組士から、諸政策を起案し諸役人の進退・諸士以上の褒貶賞罰を審議する顕職である江戸方右筆役も一五〇石以下大組士からの任用です。地方右筆役には江戸方ほどの権限はありませんが、五〇石以下遠近付士からも登用されることになっています。

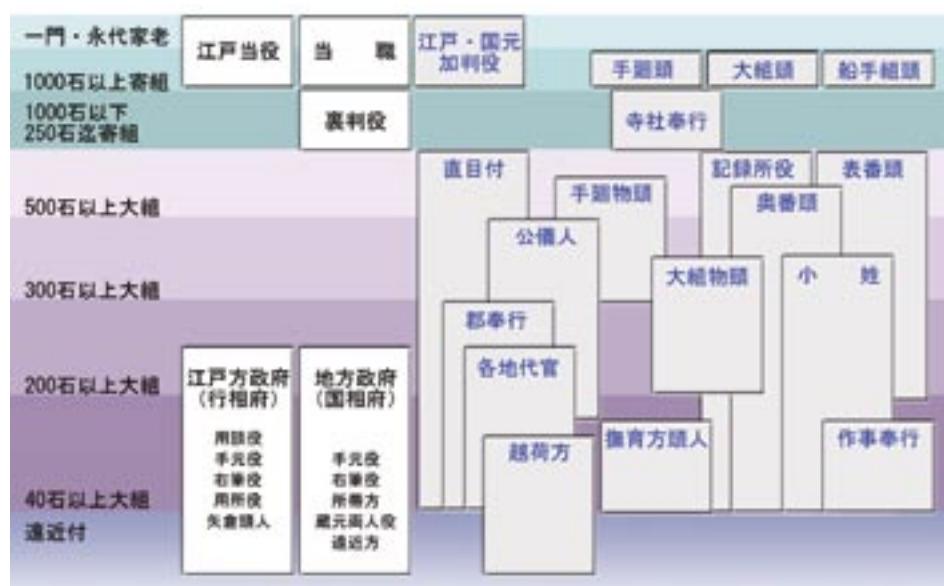
江戸方・地方の会計を預かる矢倉頭人・藏元両人役、財務担当の用所役・所帶方も二五〇～一二〇石以下、家臣団への軍役その他の課役の分配を担当する遠近方も一五〇石以下の大組士です。

「旧長藩職役一覧表」より作成。

役名	「就職階級」	
江戸方	用談役 手元役 右筆役 用所役 矢倉頭人	250石以下大組士 200石以下大組士 150石以下大組士 120石以下大組士 200石以下大組士
地方政府	手元役 右筆役 所帶方 藏元両人役 遠近方	250～150石大組士 150石以下大組士 50石以下遠近付士 150石以下大組士 250石以下大組士 150石以下大組士

「旧長藩職役一覧表」より作成。

図表4 「政府」と主な役職の「就職階級」



「旧長藩職役一覧表」より作成。

これら「政府」の「就役階級」と、他の主なみると、図表4のよう

一〇〇〇石以上の大身から四〇石まで、幅広い階層からなる大組の中でも、比較的禄高の低い層に設定されています。

これは一〇〇〇石以上寄組士が両職に就任した際、同名のものは

した際 同格あるいはそれに近い階層の武士がその部下となつたのでは、格付けの問題から心情的に命令に従い〇石以下の大組士を両職の部下として附属さ

せる機構が整つていったためと考えられています。しかし、この両職の職務を手元役が代行するようになり、また右筆役以下がその実務を担うようになったことから、「政府」諸役人が藩政の実権を掌握していると指摘される状況が生まれていきました。二五〇石以下の中級武士たちは、藩政が展開していくなかで力を付けた両職の権限の下に、「政府」の構成員となることによつて、より上位の武士たちをも凌ぐ影響力を藩政上に發揮することが出来たのです。

○「政府」へ登用された人物は、どのような人たちなのでしょうか。

この「政府」諸役への就任が、「就職階級」によつて規定されてゐる（一五〇）石以下の大組士も、出仕後直ちに「政府」の役職に就くわけではありません。その「政府」に入るまでの職歴を、周布政之助の事例で見てみましょう。

周布は文政六年（一八二三）三月三日生れ、父と兄を相次いで亡くなり、同年十二月に周布家を相続します。その際一五一石余のうち七二石を没収され、六八石余（外に一〇石余減少石）の知行が認められました。

長らく明倫館で勉学に励んだため、初めて官途に就いたのは二十五歳の時です。弘化四年（一八四七）九月に蔵元役所の管轄する金穀出納を監査する蔵元検使の暫役（見習）となり、翌嘉永元年（一八四八）六月には本役に進みます。さらに十二月明倫館検使役となつて明倫館再興に携わり、同二年（一八四九）明倫館諸生の取締役である明倫館都講役を経て、嘉永三年（一八五〇）四月地方右筆唐船方の添役（見習）に采軒し、「政府」に加わることとなります。唐船方とは外国船防備等担当の掛りで、地方右筆役が兼務する慣例でした。



周布政之助肖像画

山口県立山口博物館蔵

間藏元検使役や江戸方
大検使役を務め、また
各宰判の代官役に就い
て行政経験を積むなどして累進し、その中から「政府」へ登用されるエリー
トが選別されていきました。近世的な官僚機構にあつても、「就職階級」を同
じくする役職の中にはいくつかの昇進コースがあり、それが武士たちのモチ
ベーションを高める役割を果たしていたのでした。

転し、一時、異賊防禦手当惣奉行毛利隱岐の手元役を務めますが、嘉永六年（一八五三）九月には江戸方右筆役へ、安政元年（一八五四）十二月にはさらに手元役の御用に参与が命じられるなど、確実にキャリアを重ねて行きました。

その間、嘉永六年のペリー来航に際して、幕府がアメリカ大統領の親書を開示し、諸大名の意見を徵した際には、当時江戸方右筆添役であつた周布が、毛利家からの答申案を起草しています。この幕府からの諮問という形で諸大名に開かれた幕政一国事への参加の道は、行政官僚としてエリートの道を歩んできた周布ら「政府」諸役人にも、幕末の政局に関与する道を開いていました。

この後周布をはじめ「政府」諸役人は、藩内の政策対立によって進退黜陟を繰り返します。また藩政機構そのものも、幕末の政局を乗り切るための職制改革を断行することになりますが、それらについてはまた次の機会にお話したいと思います。

◇企画展等情報◇

▼毛利博物館(防府市多々良一丁目一五一一 電話〇八三五・二二一〇〇〇)

企画展「維新への道」

（平成二〇年九月四日～一〇月二八日）

今年は明治維新から一四〇年に当たることから、維新を推し進めた長州藩の藩主毛利氏の視点から明治維新を紹介します。

慶応三年（一八六七）一〇月一四日幕府追討密勅（討幕の密勅）や文久三年（一八六三）六月七日高杉晋作書状（奇兵隊結成綱領）、朝廷より拝領の品々など、維新的立役者となつた長州藩主毛利家なりではの品を展示します。詳しくは、毛利博物館ホームページ（<http://www.c-able.ne.jp/~mouri-m/>）を「覗くだわい」。

観覧料は、大人七〇〇円、小中学生三〇〇円、小・中学生一〇〇円（三十名以上の団体はそれぞれ二割引）です。

▼萩博物館（萩市大字堀内三五五 電話〇八三八一二五一六四四七）

明治維新一四〇年記念特別展
明治維新の光と影

（平成二〇年九月一五日～一月二一日）

明治元年（一八六八）、薩長両藩をはじめとする「官軍」は、「錦の御旗」を振りかざし、関東・東北各地へ攻めあがりました。一連の戊辰戦争に勝利した薩長の出身者は、明治政府を樹立し、新しい国づくりを開始します。しかしその一方で、戦争に敗れた側はもちろん、勝利した側でさえも、多大の犠牲を払わなければならなかつたのです。

本展覧会では、幕末になぜ長州藩が戦いの道を歩まねばならなかつたのかについて考察し、武器や軍装などの遺品を通じて、無名の戦士たちが挑んだ戦争の実態に迫ります。さらに、近代日本の新しい国づくりには、いかなる困難が伴つたかについても考えます。詳しくは、萩博物館ホームページ（<http://www.city.hagi.yamaguchi.jp/hagiaku/index.htm>）を「覗くだわい」。

観覧料は、大人五〇〇円、高校・大学生三〇〇円、小・中学生一〇〇円（三十名以上の団体はそれぞれ二割引）です。

「あとがき」長州藩がすぐれた藩士を輩出してきた理由を、その政治の仕組みに着目してみてきました。殿様を頂点に家老が全てを牛耳る時代劇のような姿とは異なり、実際には、優秀な中級武士たちが政治の重要な場面でその手腕を發揮できる仕組みが整えられていつたことがわかりました。次回は一月発行の予定です。

維新史回廊だよのせ、県内各市町の文化振興担当課や博物館・資料館、県政資料館に置いています。県内で開催される明治維新関連の企画展・イベント情報や維新史回廊だよのせのバックナンバーは、維新史回廊ホームページ（<http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/gyosei/bunka-s/ishin/index.html>）を「覗くだわい」。

皆さんの意見、お感想もお待ちしております。